杉並区立松溪中学校同窓会ニュース

§1　鈴木良雄さん　ご逝去



11 期生 鈴木良雄さんが 2026 年逝去されました。鈴木さんは 2023 年 6 月、母校の協力を得て同窓会が主催した、“祝松溪中創立 75 周年記念鈴木良雄、梶原まりこジャズコンサート“に出演いただき、念願の母校在校生応援を実現いただきました。
同窓会は 2018 年に芝祐靖さん（1 期）による“祝創立 70 周年記念伶楽舎雅楽演奏会””を実施しましたが、両行事は復活同窓会活動の金字塔です。
鈴木さんの突然のご逝去は悲しいかぎりです。ご出演を改めて感謝申しあげ心からお悼み申しあげます。
ご生涯の燦然たる活躍やジャズコンサートの模様などはホームページに記録してあります。ぜひご覧いただきお人柄をおしのび下さい。
右下の写真はコンサート直前の母校吹奏楽部との共演リハーサル風景です。中央の小さなベーシストが鈴木さんです。60 歳以上も違う若き後輩を誠心誠意丁寧に指導されていたお姿に感動しました。

コンサート後、鈴木さんによせられた在校生の感謝メッセージの一部をご紹介します。ホームページ掲載記事の一部です。

1 年　IR さん（女性）



この度は母校にあたる松溪中へお急がしい中おこしいただきありがとうございました。 元々音楽自体大好きでクラッシックをよく聞いておりましたが中々ジャズを聞く機会がありませんでした。 そんな中今回の 75 周年記念コンサートによりジャズの歌についてどのような意図があるのか考えさせられました。 合唱やカラオケで歌うアニメソングなどと違った魅力があり、その魅力が梶原様にあてはまってとてもよかったです。約 3 時間のコンサートの中で歌があるのとないジャズではまた別だと感じました。これをきに少しずつジャズとふれあえていけばと思います。

3 年　SY さん（女性）

私は吹奏楽部でアルトサックスを吹いています。一緒に演奏することができてとても嬉しかったです。
ありがとうございました。クラッシク音楽のコンサートでみるコントラバスは雰囲気が全く違って格好よかったです。 ジャズの独特なリズムが、より強調されていて聞きやすかったです。どの曲も本当に格好よくて、

特に「新宿」のメインの旋律が好きでした。 私はチェロをずっと習っていたのですが、弓で弾くのと弦をはじくのでは音が違い 楽器は色々な魅せかたができるということを改めて今回しりました。これからも音楽を続けたいと思います。 サインありがとうございました。大事にします。

§2 第７期同期会が開催されました。



1957 年（昭和 32 年）松渓中学 3 年 B 組を卒業した我々は学生時代や若手と言われた頃はかなりの人数が定期的に集まり、仲の良さを誇っていた様に思っていましたが、その後社会の中での立場が増える中、先細りの状態になって来ました。それには中学時代に中心的存在だった者や荻窪駅近くの商店街の店主達が若くして何人も早逝した事も要因だったかもしれません。
時が過ぎ、定年近くの歳になり五人の男達が荻窪駅近くの居酒屋で年に数度呑み合う様になり、そのチェーン店のアルバイト学生と意気投合、彼が異動する吉祥寺、中野と彼のいる店を追い駆けながら続き、何時の間にやら四半世紀が過ぎてしまいました。

会の名称は還暦近かったので「アラカン会」と命名、その後アラコキ会、アラキジュ会、そして今はアラサン会と変遷して来ました。五人のメンバーだったが今回は 9 人の女子会員が増員となり爺さん、婆さんの賑やかな会合となりました。それぞれの住まい地が一都四県に拡がっているのでここ三年間は皆の地の利がある東京駅前の丸ビルレストランに集まっている。来年は卒業 70 年になるのでそれまで生き残ろうと約束し散会しました。
当日、東京駅前広場で撮影した全員の集合写真を添付します。＜中原＞

§3 第 11 期同期会が開催されました。



2026 年 3 月 15 日、11 期生の「傘寿の会」が開催されました。
80 歳になったことを互いに祝い合う「傘寿記念同期会」を区立杉並会館で開催しました。11 期生は戦後の昭和 20 年生まれで、44 名が出席して、12 時～15 時半という、時間をわすれる大宴会でした。youtube にその様子をアップしていますので、ご覧ください。

https://youtu.be/EL28mjSqHpU

§4 小林眞人さん（10 期）



鉄旅の蹉跌　―てつたび　の　さてつー

“ふふらんすへ行きたしとおもえども　ふらんすはあまりに遠し”
詩人は旅そのものを渇望していたのではないと思うのですが、誰にとってもいつの時代でも旅はあこがれでありかつあきらめでもあります。

“北海道へ行きたしと思えども　北海道は余りに遠し”
東京生まれの私にとって、子供のころから伯父のいる北の大地は最高のあこがれであり、かつ最大のあきらめでもありました。

太平洋戦争末期に荻窪で生まれ、８２歳の今に至るまで杉並区以外での暮らしを経験していません。小学校から中学・高校まで、毎年新学期になると転校生を迎えていました。彼らがみんなから親身に世話されているのを見ると、私も心の内で転校生にあこがれ、見知らぬ土地の学校で歓迎されることを夢見ていました。

父親は東京から絶対に転勤できない天職に就いていたので、自分が移動しなければなりません。東京を出てどんな仕事ができるだろうかと妄想していたら、結局東京から出られそうにない仕事に就くことになってしまいました。でも鉄道が好きなので、とりあえず脱東京、脱自宅で旅に出て自己満足に陥るしかありません。

会社勤めをしてからは、たまにある出張という脱東京のチャンスを逃さず、未知の土地なら鉄道を使ってできるだけのぞいて来るように計画調整しました。月曜日に札幌で会議が設定されると、千歳空港到着の日程が組まれます。しかし、新幹線が北海道に乗り入れる前でしたから、東北本線で行くことにしました。札幌駅に月曜日朝到着ならば会議に間に合うが、余裕を見て前日、日曜日の朝入ろうと企みました。

土曜日 16 時 30 分上野発の北斗星に乗り込み、個室に酒、弁当、おつまみを並べます。酩酊する前にひと風呂じゃなくてひとシャワー（３分間？）浴び、浴衣で寝台に寝ころび、流れゆく窓外の夜景を見ながらのひとり宴会。食堂車でのフレンチディナーは超富裕層におまかせし、上野から闇夜をずっと見続けて青函トンネルに突入しました。苫小牧廻りの特急は朝 6 時、同じ方向を見続けて首が回らなくなった私を札幌へ運んでくれました。

嫌いな俚諺なのですが、「旅の恥は掻き捨て」という無責任を自ら地でいってしまったことや出張のたびに自由時間を捻出して鉄道旅を楽しんできたというツケも重なり、失敗も積み重なっています。海外では言語・慣習の違いで仕方なく掻き捨てたこともありますが、国内でも結構やっていました。



北斗星が走る前、空路以外で本州・北海道を結ぶのは青函連絡船です。上司と二人、予定通り北海道での仕事が終わり、函館の鮨屋で打ち上げをして連絡船に乗り込みました。船の寝台は列車より広くて快適です。酩酊を通り越していました。目が覚めると周囲がなにやら慌ただしい雰囲気。ベッドのカーテンを開けると船員さんらしき人があたりを掃除している。 頭の中が真っ白、目の前も真っ白。“やばっ！”“ほんとにやばっ！”“青森に着いている。接続　している上野行き特急「はつかり」の出発時間！” この人生最大の緊急事態の時系列状況が今でも記憶からごっそり抜け落ちているのです。浴衣を着たまま船を降りて特急に飛び乗ったのか、船から列車へ向かう桟橋（？）途中で着替えたのか、それとも特急の中で着替えたのか。今もって思い出せません。発車直前の特急車内で新聞に目を通している上司の隣りになにくわぬ顔をして静かに座りました。上司は一言も発せず、ひげも剃っていない私をチラと見たみたいです。上司はできる人でした。

予想に反して、と言って特に予想もしてなかったのですが、旅の途中で列車から降ろされたり、降りたら帰りの列車が無かったりというのもありました。

北海道の広大な土地感覚は東京にいるとなかなかつかめません。地図帳では見開き２ページに北海道、同じページに同尺の東京都は載っていないので視覚体感的な距離比較ができないということだと思います。
連絡船寝過ごし以前、初めての札幌出張では時刻表をろくすっぽ見ずに、札幌、函館間はせいぜい１、２時間ぐらいだろうと思い込んでいました。札幌で少々飲み過ぎ、乗った列車は函館まで行かず、長万部止まり。オシャマンベ、面白い地名。聞いたことはあるけどまさかここで降ろされ一拍することになるとは。この時間、駅前は人通りも少なく、広場の反対側に温泉マークの看板を見つけました。長万部温泉という旅館です。風呂が小学校のプールほどの大きさ。海水を沸かしているのかトロロ昆布のようなものが湯中に漂っていました。客は私以外なし、昆布に絡みつかれながら泳ぎました。小型トドが浮かんでいるみたいなものですが、湯を舐めるとちょっと塩辛く、体中がぬるぬるとして官能的なものも感じました。

今から半世紀ほど前、真夏の福井出張の帰り、行きとは反対に金沢を廻り、糸魚川を経て松本で一泊して帰ろうと考えました。日本海側の街や人、景観や文化との接触は太平洋側に比べると圧倒的に少なく、噂に聞く富山の鱒鮨、切り立った親知らずなど珍味名所はじっくり味わい見ておくべきだと決めて鈍行に乗りました。
日本海側海岸線は想像以上に長く、糸魚川で乗り換えるころには日は沈んでいました。駅アナウンスによるとこの列車は信濃大町まで行かず、南小谷止まり。聞いたことのない駅名、でも終点なんだから旅館ぐらいはあるんだろうと考えました。ミナミオタリ。山の中に入っていくのに、なんかオットセイや海鳥のようなおもしろい駅名だとワクワク感がたかまってきました。

南小谷駅、夢を打ち砕くかのように駅前は真っ暗。土産物屋、パチンコ店無し。タクシー、普通の車、オート三輪、何も走っていない。しかし降りた客は暗闇でもすべて見えているかのような足取りで三々五々散らばっていきます。そうか、みんな地元の人なんだ。改札に戻り、駅員さんに哀願。“交番で聞いてみなさい。” 赤いランプをみつけ、民宿を紹介されました。電話の問い合わせ口調から判断すると単なる宿屋ではないみたい。もしかしたら地元の寛厚な名士の家か、旅館より大きなお屋敷か、そこには若い娘さんがいるか・・・。手描き地図の紙切れを片手に、街灯もほとんどない道を歩くこと３分。○△薪炭店が今夜一泊の宿でした。

ガラス戸を開けて “交番で紹介されたものです。” とできるだけ大きな声を出す。広い土間に灯りがつき、中学生くらいの坊主頭の少年が出て来る。うーむ、若い娘はいない。薪・炭のほか灯油も扱うお店らしく、土間には俵と一斗缶が２、３個積み上がっていて自転車が１台。“お風呂見といて！”すぐに障子の奥から母親らしい声が中学生に飛んで来る。これ以後、思い出すことができるのは、中学生が盆の上に立てたビール瓶をしっかりとつかみ、黄色いたくあん２、３切れをのせた小皿といっしょに持ってきてくれたことのみ。

地方鉄道だけでなく、東海道新幹線でも運行中止となり焦って宿泊所探しをしたことがありました。京都での会議が終わり、夕方岐阜羽島を走行中に車内放送。電気系統の事故で名古屋から先へは進めない、再開の見込みは不明とのこと。名古屋駅の観光センターは宿泊所を探す乗客で長蛇の列。超高級ホテルなら取れたのでしょうが、カードも普及していないので、現金、直談判勝負。無理、無理。名古屋に親類はいない。しかし、桑名方面に名前しか聞いたことがないけれど母方の遠い遠い親類がいる記憶が出てきた。東京の母へ電話。母が窮状を伝え拝み倒してくれた。

関西線に乗って、桑名方面に行く。富田か富田浜か忘れたけど線路沿いに家が見えるということで必死で探した。わりと大きな病院だった。看護婦（昔は看護婦さん）さんに案内されてベッドにたどり着いた。やたら脚



の高いベッドで、マットも固い。手術用のベッド？その夜は体にメスを入れられることもなく安眠できた。翌朝、病院食が運ばれてきた。帰り際に看護婦さんに“院長先生からです”と言われて、桑名の蛤しぐれ煮をお土産（？）退院祝い（？）でいただいてしまった。院長先生出勤は遅いみたいだった。院長先生のご尊顔、ご遺影も未だ拝眉していません。・・・・。鉄道に乗り損なっても、事故で運行できなくなっても代替施設が確保できればいいのですが、あやうく野垂れ死かという失敗もしました。でも、今まで生きてきたわけですから鉄路の神からは見放さなれなかったということだと思います。

学生時代の夏休み、ローカル線でとにかくゆっくりと知らない土地を見たいと思い、豊橋から飯田線に乗りました。天竜川にそって北へ上がっていくので、雄大な天竜川や中央アルプスの山々が楽しめるだろうと考えていました。一大観光地ですが、この頃は、旅行客もそれほど多くなく、長野県の中央部に向かう列車は空いていました。列車から天竜川はほとんど見えなかったので、とりあえず川が見えそうな駅で降りて探索し、そこで宿をとろうと考えました。佐久間駅。下車。巨大な佐久間ダムの駅だ。日本最大のダムだ。見られるかもしれないという独りよがりのまるで根拠ない即断で降りました。期待は膨らみましたが、降りた客がほとんどいなかったので一抹の不安。駅前にダム観光の看板はなく、旅館のような建物も、ダムに行けるだろうと思わせる道の案内もなし。船下りがあると仄聞していたのに、うっそうとした竹ヤブに阻まれて川面から反射する光も漏れてこない。このあたり夏の朝が早いだけ、日の入りも早い。ダムは後回しにしてまず今日の宿を確保しなければと駅に戻り、とにかく大きな駅へ行こうと考えました。

駅の時刻表を穴のあくほどみつめましたが、この時刻以降、佐久間に停まってくれる列車は上りも下りも無い。相談する駅員さんもいない。何も無い。駅から少し離れた道路沿いにようやく１軒のこぢんまりとした料理屋旅館を見つけました。川魚料理を食べさせる店はある、今日は思い切って鮎でも食べて泊まりをお願いするか、と忍び寄る不安を打ち消しつつ甘い考えで玄関を開けました。

“お客さん、お一人ですか？　うちは、お一人のお客さんはお泊めしないんですよ。”
“・・・じつは、帰りの列車がなくなりまして・・・。”

戦後の混乱期から続いているのかどうかわかりませんが、観光宿泊に関しては確かに一人客は敬遠されていました。生活苦か失恋か、一人泊まりで自殺する事件が多かったのかもしれません。その頃の世の中、単独旅行を推奨する風潮はなかったように思います。
勿論、
　『何となく汽車に乗りたく思いしのみ　汽車を下りしにゆくところなし』石川啄木

こんな歌が話題となって人口に膾炙してるはずは絶対になく、文学的に迫るのは止めました。
女将さんの最終決断が早まらないように、私は言動に最大の神経を集中させて同情を得ようとしました。
そして非情な状況の中で、ひとつのとっかかりを見つけました。それは、女将さんの声や態度にお金のない学生を見下したような嫌味がなかったことでした。

“どんな部屋でも構いません・・・・・・。
“ほんとに女中部屋でも・・・。”（失礼，今は中居さん）
奥の方へ消えてからしばらくして、
“・・・・・どうぞ。”



玄関わきから少し傾斜のある廊下へ入ったので、もしかしたら大河が眺望できる部屋かと期待したのも束の間、廊下左手の障子戸を開けて小部屋に通されました。確かにほんとに著しく手狭で窓のない部屋でした。しかし、
天竜川沿いの竹ヤブで野垂れ死ぬという人生で終わらなかったのは、天竜川の流れのように広量な心を持った女将さんのおかげです。　　終わり

§5 松溪校域散歩：武井邸大ケヤキ、成田西ふれあい農業公園

かつてケヤキは杉並区を代表する樹木でした。
五日市街道の並木など各所にそびえ、天に屹立する勇姿は下から見上げると小さな自分を忘れて勇気ももらいました。
ケヤキは松溪正門にも若木がありますが、武井邸のは直径２メートル以上（多分)、高さ 20 メートル以上、樹齢不詳、しかも５本、“杉並区保護樹林”、“後世にのこしたい屋敷林”として大切にされています。



武井邸は善福寺川右岸、神通橋上の河岸段丘にあります（荻窪 1-15-11)。広大な敷地は北側（母屋、お蔵、お庭）と南側（畑と果樹園）とからなり、邸内中央の舗装され階段付遊歩道により、ありだれでも（自転車でも）通行可能です。東には善福寺側緑地越しに新宿副都心の高層ビルを遠望できます。





せっかくですから、となりの“成田西ふれあい農業公園”の訪問をおすすめします。
一度神通橋の道に降りて、右へ南下徒歩２分、すぐ左折すると広大な公園に到着します。

ここも元は武井さんの畑でしたが、杉並区は広大な土地を整備、小区画に区切り市民へ貸し出しました。大きな青空の下に多数の野菜畑が広がります。

この農業公園は善福寺川沿いに多くある古代遺跡のひとつ“谷戸（やと）遺跡”の上、地下には埋めもどされた古代人住居跡が眠っています。杉並区の発掘記録によれば縄文前期からの住居跡で、沢山の生活道具が出土したとあります。松溪中敷地をふくむ、善福寺川両岸の古代遺跡は同窓会ニュース第 10 号で紹介しました。https://media.toriaez.jp/y2678/961.pdf）

園内にはベンチもあります。頭越しの武井邸大ケヤキ頭頂部を見ながら、3 千年の太古に想いを馳せて下さい。

§6 閑話休題：情けは人のためならず

情けは人のためならず。
施せし情けは人のためならず。
おのがこころの慰めとしれ。
**　新渡戸稲造、（武士的一日一言）**

前２段のみ流布してしまい、本来の慈善の勧めが、転じて、
1：情けをかければ報酬が得られる、鶴の恩返し　因果応報、さらに転じて、
2：人に情けをかけて助けるのは結局その人の為にならない、自業自得、
とかとの誤解多いようです。

数年前、〇市の福祉担当職員が　“生活保護なめんなよ”　と印刷したシャツをきて執務した事件がありました。総理大臣は、“自助◎、共助〇、公助×”　と公言しています。
これらは誤解を超えてもはや悪意です。

新渡戸稲造さんは 1927 年“東京女子経済専門学校＝女子経専”の創設者です。同校は現在東高円寺の“新渡戸文化学園”として継承されています

§7 会計報告

第 28 回世話人会報告（2025 年 12 月 14 日）残高		¥295,895
2026 年 1 月 1 日繰越金		¥295,895
	収入	支出
受取利子（4 月 1 日と 10 月 1 日）	￥698	0
2026 年 10 月 30 日残高		¥296,593

§8 お知らせ

松溪中のホームページが全面改訂されました。写真を多く使い「学校のようす」コラムが新設、「松溪だより」も毎月発行され、関係者に母校の現状を伝えようとの意図があふれています。以下の URL から訪問下さい。

https://suginami.schoolweb.ne.jp/13030006/

同窓会は 2016 年以後の活動を同窓会ホームページに記録しています。今までの掲載記事の総索引をつくりました。以下の同窓会内 URL でご覧いただけます。

https://toriaez-hp.jp/assets/1-C070000063/uploader/5DTvugvjCJ.pdf

同窓会は通信に電子メールを利用しています。ご質問ご要望など下記の同窓会メールアドレスへ
お名前、卒業年度、メールアドレスをご連絡下さい。同窓生連絡リストに登録し、“同窓会ニュース”や“松溪だより”を定期配信します。
また同窓会ウェブサイトには総ての復活以降の全ての同窓会情報を記録しています。スマホでも閲覧できます。

同窓会ウェブサイト “https://www.showkeidousoukai.org ”
同窓会メール taikiaratani@yahoo.co.jp 又は**ミニ世話人会** 2555batman@gmail.com(9 期小林)

杉並区立松溪中学校同窓会